



おくりもの
ことばの贈物

定価はカバーに表示してあります

岩波文庫別冊 6

1985 年 5 月 16 日 第 1 刷発行
1994 年 8 月 8 日 第 20 刷発行

編 者 岩波文庫編集部

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051

印刷・三陽社 カバー・精興社 製本・田中製本

ISBN4-00-350006-7

Printed in Japan

岩 波 文 庫

35-006-1

こ と ば の 贈 物

—— 岩波文庫の名句 365 ——

岩波文庫編集部編



岩 波 書 店

読者へ

どんなに短かな章句であれ、原著原作からじかに引いた選りぬきの一句は、ダイジェスト・解説などでは伝えられない生の魅力^{なま}を味わわせてくれます。

好評の『ことばの花束』につづく岩波文庫の名句集第二冊目『ことばの贈物』をおとどけします。

引用句の選択にあたっては『ことばの花束』と同じ方針にしたがい、最大限八〇字前後の章句であること、文の途中を省略して引用しないこと、前後の脈絡から独立して読むことのできる文であること、などを心がけました。

書名のあとに示してある数字は、その引用句の載っている岩波文庫のページです。

思いがけなくめぐりあった小さなことばがきっかけとなって、読書の地平がい

「そう豊かに拡がってゆく——そんな出合いを楽しんでいただけることを希っております。」

一九八五年五月

岩波文庫編集部

目次

読者へ

I 文章は簡単ならざるべからず――

7

II 精神のない専門人、心情のない享樂人――

41

III 寒いほどひとりぼっちだ！――

75

IV よき友、三つあり――

109

V 望みをもちましよう――

145

書名索引

著作者名索引

本文カット

I 井上長三郎

II 斎藤義重

III 飯山 勇

IV 島田しづ

V 仲田好江

I
文章は簡単ならざるべからず――

文章は簡単ならざるべからず 最^{もつとも}簡単なる文章
が最面白き者なり。

1 正岡子規
『筆まかせ抄』 83

主人は好んで病氣をして喜んでゐるけれど、死ぬ
のは大きらいである。死なない程度において病氣
という一種のぜいたくがしていたいのである。

2 夏目漱石
『吾輩は猫である』 (下)
36

鑄^い型^{がた}に入れたような悪人は世の中にあるはずがあ
りませんよ。平生はみんな善人なんです、少なく
ともみんな普通の人間なんです。それが、いざと
いうまぎわに、急に悪人になるんだから恐ろし

3 夏目漱石
『こころ』 76

いのです。

飄然^{へうぜん}として何処^{いづく}よりともなく来^{きた}り、飄然^{へうぜん}として何
処^くへともなく去る。初^{はじめ}なく、終^{おはり}を知らず、蕭々^{しやうく}と
して過ぐれば、人^はの腸^{はらわた}を断^たつ。風は、過ぎ行く人
生の声なり。

4

徳富蘆花
『自然と人生』 73

明日は、明日はと言^いって見たところで、そんな明
日はいつまで待^{まち}っても来^きやしない。今日はまた、
またたく間^まに通^まり過^すぎる。過去^{まこと}こそ真^{まこと}だ。

5

島崎藤村
『夜明け前』第二部(下)
278-279

前途は遠い。そして暗い。しかし恐れてはならぬ。恐れぬ者の前に道は開ける。行け。勇んで。小
さき者よ。

有島武郎
『小さき者へ・生まれい
ずる悩み』 20

人間が鳥のように飛び、魚さかなのように水中を行くといふ事ははたして自然の意志であらうか。こういう無制限な人間の欲望がやがて何かの意味で人間を不幸に導くのではなからうか。人知におもいがっている人間はいつかそのためむごい罰をこうむる事があるのではなからうか。

志賀直哉
『暗夜行路』後編 26

恋は人生のすべてではない、その一部分だ、しかも　ごくわずかな一部分だ。恋は遊戯だ、歌のようなものだ。

8

“ISIKAWA TAKUBO-
KU ROMAZI NIKKI”
(啄木・ローマ字日記) 161

唯円　私は恋をしだしてから、変に死の事が気になりだしました。(ひとり言のごとく)恋と運命と死と、皆どこかに通じた永遠な気持ちがあるような気がする。

9

倉田百三
『出家とその弟子』 139



何もしないという事を、父が一番厭^{いや}がっていた事を私はよく覚えてゐる。何もしないよりはいい、と言う言葉を幾たび私は聞いたろう。

10

小堀杏奴^{あんぬ}
『晩年の父』
30

富めるものはつねに貧におびえる習なれば、もつとも乞食をにくむ。富を積むは罪をかさねる所以^{ゆえん}。

11

石川淳
『至福千年』
287

——海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、仏蘭^{フランス}西人の言葉では、あなたの中に海がある。

12

『三好達治詩集』
「郷愁」
89

初めて東京を訪れた際、私は汽車の窓からまぎれもない大昔の塵棄場、われわれのいう貝塚キヨケンメディング シェルヒープを発見した。この貝塚は、東京から約六マイルの大森にある。

13

E・S・モース
『大森貝塚』
『エー』



一羽の燕が、また或る一朝夕が春をもちきたすのではなく、それと同じように、至福なひと・幸福なひとをつくるものは一朝夕や短時日ではない。

14

アリストテレス
『ニコマコス倫理学』(上)
34

身体を訓練しない者は身体を使う仕事をなし得ないごとく、精神を訓練しない者はまた精神の仕事を行なうことができない。

15

クセノフオーン
『ソークラテースの思い出』
30



結婚したほうがよいでしょうか、それとも、しないほうがよいでしょうかと訊ねられたとき、「どちらにしても、君は後悔するだろう」と彼は答えた。

16

ディオゲネス・ラエルティオス
『ギリシア哲学者列伝』
(上) 144
「ソクラテス」

徳性は宝石のようなもので、あっさりした台に嵌^はめこまれたものが最上である。

17

『ペーコン随想集』 100

ものごとが実行に移されたら最後、迅速に匹敵する秘密保持はない。

18

『ペーコン随想集』 103

さきへ進めば進むほど道がひらけてくるなんてのは、神さまかわずかなたぐい稀な天才のほかにはありません。

19

デイドロ
『ラモアの甥』 24